

さて今年のセ・リーグ覇者は？(Part 3)

またしても順位相関分析を試みてみました

およそ3カ月ぶりに順位表を作成してみました。この3カ月間の間に、下表の「B セ・リーグ順位表(2022/6/15 現在)」から上表の「A セ・リーグ順位表(2022/9/6 現在)」に変動していますが、3カ月にチーム順位首位のヤクルトと最下位の中日はそのまま。しかし、ヤクルトは7月2日に史上最速でマジックを点灯させておきながら大幅にペースダウン。「打率」で3位、「本塁打」と「得点」で1位順位アップしたものの、「防御率」で3位「失点」と「失策」で2位順位ダウンしたのが響いています。三冠王に手が届くところにいる4番バッターの村上宗隆の活躍により、攻撃力は強化したものの、やはりヤクルトの強みは「攻め」と「守り」のバランス。やがてマジックが再点灯することでしょうから、セ・リーグの覇権を握るのは確かなところでしょうが、その後のクライマックスシリーズ更には日本シリーズを勝ち取るためにはヤクルト本来の「守り」の力を取り戻すことが必須条件のようです。

<A セ・リーグ順位表(2022/9/6 現在)>

チーム順位	打率	本塁打	得点	失点	防御率	現在	盗塁	失策
1. ヤクルト	.254(1位)	152(1位)	543(1位)	474(4位)	3.48(5位)	101(5位)	64(2位)	60(3位)
2. DeNA	.252(3位)	97(3位)	413(5位)	439(3位)	3.39(2位)	105(4位)	42(5位)	54(1位)
3. 阪神	.244(5位)	76(5位)	432(4位)	371(1位)	2.60(1位)	130(2位)	98(1位)	74(5位)
4. 広島	.254(1位)	80(4位)	481(2位)	476(5位)	3.44(4位)	133(1位)	25(6位)	66(4位)
5. 巨人	.241(6位)	136(2位)	475(3位)	535(6位)	3.80(6位)	80(6位)	55(3位)	74(5位)
6. 中日	.246(4位)	58(6位)	351(6位)	437(2位)	3.41(3位)	123(3位)	50(4位)	58(2位)

<B セ・リーグ順位表(2022/6/15 現在)>

チーム順位	打率	本塁打	得点	失点	防御率	犠打飛	盗塁	失策
1. ヤクルト	.241(3位)	64(2位)	244(2位)	195(2位)	2.73(2位)	51(4位)	39(2位)	27(1位)
2. 巨人	.241(3位)	68(1位)	250(1位)	272(6位)	3.58(4位)	42(6位)	33(3位)	42(6位)
3. 広島	.249(2位)	25(6位)	235(3位)	227(3位)	3.32(3位)	71(1位)	19(6位)	30(2位)
4. 阪神	.232(6位)	45(3位)	206(4位)	185(1位)	2.65(1位)	60(2位)	48(1位)	31(4位)
5. DeNA	.250(1位)	43(4位)	198(5位)	243(5位)	3.75(6位)	50(5位)	21(4位)	30(2位)
6. 中日	.241(3位)	35(5位)	188(6位)	236(4位)	3.68(5位)	52(3位)	20(5位)	31(4位)

DeNA の順位アップの裏に見えるもの

チーム順位では、過去2回にわたる順位相関分析では全く目立つところがなかったDeNAが3か月の間に5位から2位へとランクアップしたのが光っています。「防御率」で4位、「失点」で2位、「失策」で1.5位それぞれ順位アップして、「打率」だけ1位の一風変わった「攻め」のチームから「守り」のチームに変身しつつある姿が見えるような気がします。しかし、かといって、DeNAでは、勝利数ランキングで大貫晋一が阪神の青柳晃洋の12、巨人の戸郷翔征の11位に次ぐ10で3位につけてはいるものの、防御率順位10傑に顔を出している投手は一人もいません。むしろ、セーブ数順位で、ヤクルトのマグガフ45に次いで山崎康晃が同率2位の42につけ、ホールドポイント順位でも阪神の湯浅京己の39に次いでエスコバーが2位の37、伊勢大夢が同率3位の36を記録しているところから、主に「救援投手力」の強化が順位アップにつながったものと考えられます。しかしこれとは別に、入団2年目の牧秀悟を4番打者に据えてそれなりの育成効果を出しているところからしても三浦大輔監督の人材育成能力の高さが特筆されるべきなのかもしれません。

原辰徳監督更迭は時間の問題

3か月の間に5位から2位へとランクアップしたDeNAと反対に2位から5位にランクダウンした巨人では、「打率」、「得点」、「防御率」の順位ランクがそれぞれ2位下がっているのが響いているようです。「本塁打」だけはずっと1位を保っていたのですが、これもヤクルトに首位を譲っています。「これで、クライマックスシリーズ進出まで逃

したら原辰徳の首が危くなるんじゃないか」という声も聞こえてきました。そうですね、昨シーズン原辰徳監督がコーチングスタッフが決定した後で桑田真澄投手コーチが巨人に招聘されてきたのも、日本ハム時代に暴力事件を起こして以来引き取り手のなかった中田翔選手を引き取ったのも、ご存知ナベツネ元オーナーの仕業でしょう。二軍監督であった阿部慎之助が一軍コーチとなって然るべき活動を始めた様子でもありますので原辰徳監督更迭は時間の問題なのでしょうね。アンチ巨人派の私から見ても原辰徳監督の人材育成についての無定見ぶりにはもうウンザリです。典型的なのは内野手の吉川尚輝。滑り出しの4月末までは1番打者.342の高打率で「ようやく巨人にも格好のリードオフマンが現れたな」とアンチ巨人の私にも嬉しい話だったのですが、なんと原辰徳監督は1番に丸佳浩を起用し吉川尚輝を3番バッターに起用し始めましたね。往年の名リードオフマン柴田功さんも「打者にはタイプがあるのに」としてこの打順には「理解に苦しむ」と首をひねっていました。なんとしても本人の吉川尚輝自身が「あれれ？自分が期待されていたのは、リードオフマンとしてじゃなくてクリーンナップだったのかいな」と感ったことでしょう。はたして、すぐに調子を崩して下位打線に“配転”されて不振続き、ようやくシーズン終盤に至って1番に戻ってきて活躍の場を取り戻した形ですが、なんとも名リードオフマンのデビューというのには情けない1年になってしまいました。阿部慎之助新監督殿(と私は勝手に決めつけちゃっています)、どうぞ、指導力のあるコーチを選定したうえで、選手を育てる選手起用法を考えてくださいな。

「筋肉の強化」をし合ってより高次のペナントレース展開を

しかし、同じ三塁手の村上宗隆の躍進ぶりと、岡本和真の凋落ぶりは、好調ヤクルトと低迷巨人の明暗の差を遥かに超えたショッキングな出来事でした。私は昨年のMLB開幕時点のエンゼルスの大谷翔平の姿をテレビで見て「遅くなったな」と思いました。「どうしてこんなに遅くなれたんだろう」と思う私の目の前に、ジムで筋トレに励む大谷翔平の姿がテレビ画面上にふと現れました。「なるほど、昨年損傷した右屈曲回内筋群を癒しながら大谷翔平は専門家のアドバイスを心得てインナーマッスルを含む筋肉の強化に努めていたのか」とかと思っていたところ、ご存知の通りのMLBでも有数なレベルの打撃力と投球力を発揮しましたね。今年の開幕時の村上宗隆も、昨年初頭に大谷翔平から受けたのと全く同様の「遅くなったな」という雰囲気醸し出していました。「大谷さん、結構映像で見ますね」と語る村上宗隆ですが、大谷にできて自分には欠けているインナーマッスルを含む筋肉を鍛えることに成功したのでしょう。「左足の使い方がすごく。僕にはできない。」と嘆いていた左足の使い方ができるようになったのも、強い打撃力を生み出すためにインナーマッスルを含む筋肉を鍛えた結果だと思います。これに引き換え、岡本和真の開幕時の情けない姿。広岡達郎氏によると「体が絞れていない」ということですが、破格の進歩を果たすのに欠かせない「筋肉の強化」は全くできていない様子があり、アンチ巨人ながら、「いったいこのオフに何を鍛えていたのだ！」と怒鳴りつけたくなりたくなるような気配でした。競技は違いますが、大相撲でも小錦さんが「部屋別稽古だけ続けていても成長は果たしにくい」と述べています。岡本和真ばかりでなく、阪神の藤浪晋太郎、佐藤輝明にしても然りで、今年のオフには、「普通の練習によって体を絞る」だけではなく、「自分の投げるボール、打つボールの質を改善する為に必要なインナーマッスルを含む筋肉の強化のトレーニング」に励んで、より高次のペナントレース展開をしてほしいものだと思います。